

## 渡辺 明という人 VII

2013年がスタートして三週間が過ぎた。この日1月21日、今年はじめてのお昼をアキラさんと食べながら、お互いの年末年始の近況を話し合った。早くもアメリカでは2013 スーパークロスシリーズの第一戦がスタートして「スズキRM-Z450 '13モデル」が初戦から勝利したことを聞いた。それに比べると日本のレースのノンビリしたことが判る。第一戦が九州熊本の4月スタートである。

その国の文化と言ってしまうとそれまでであるが、「ネーションズ」の開催が去年は九月にベルギーで開催されたが、この九月までには、各国の全レースは終了して、その勝利者が意気揚々と参戦してくるのである。日本のタイトル戦はこの時点であと2～3戦残っていて、接戦中のトップライダーは、リスクを思えば、ネーションズ参加をキャンセルしてしまう。当然な話である。

とどのつまりが全日本第二グループの選手がエントリーという流れである。結果はおのずと知れる。この様な状況では、我が日本チームが陽の目を見られるのはいつのことになるだろう。

「参加する事に意義がある」とも云われる「オリンピック精神」はもう「死語」でもあるのだろうか。小国から、数名がやっとの思いで参加するオリンピックの入場式パレードなどを観れば、平和の祭典「オリンピック」も確かに「参加する事に意義」があるのだろう。今後、MFJもこの辺をよく考慮していくことが課題であるかと思う。

この日、食事もそこそこに、アキラさんに今から益子（益子焼きで有名）まで行きませんかと切り出した。宇都宮から東へ一時間ほどの焼き物の町である。アキラさんも午後の予定がなく即、快諾してくれた。益子には、往年のモトクロスライダーでもあった陶芸家の「福島晴雄先生」がいる。

人間国宝の先輩達が逝かれて、現在では、益子の陶芸家としては第一人者の重鎮である。もちろん、アキラさんも昔から面識はあり旧知の仲である。この二人を再会させることがわたしの目的でもあった。全日本レースの準備が始まる前の今日がチャンスと決めておいたのである。

この二人を再会させることのメリットは二点ほど考えられた。一つは、生きる世界は違うものの、それぞれの立場で頂点を極めている者同志を再会させることは、それなりに意義があると考えたからである。もう一つは、アキラさんもシーズンが始まれば、レースの事で一年中、気が休まらない

ハードさを去年、目の当たりにしていたわたしは、栃木県のふるさとの益子焼という「陶芸芸術」の別次元に触れさせ、意識を「ニュートラル」にして欲しかったのである。

アキラさんは芸術が即、直感的に理解できる人である。陶芸家の「福島晴雄」とモトクロス世界チャンピオンの「渡辺明」が、久しぶりの再会でどのような会話になるのかが、わたしのひそかな楽しみでもあった。一時間ほどアキラさんのピックアップでのドライブとなった。先週降った初雪が「益子の里」にはまだ残っていて、畑の美しい稜線が純白の雪に敷きつめられていて、ことのほか美しく感じられた。「へーエ、益子ってこんなに綺麗だったっけ？」と、アキラさんも「少年用語」でくったくのない表情で感動している。福島窯宅に到着すると、福島先生と奥様が出迎えてくれた。

レストランから電話したが繋がらないので、とりあえず来てしまったのだから訪問されたほうには、突然の訪問客であり申し訳なく思った。いつ尋ねても「年の摂らない？奥様」が、素敵な笑顔で迎えてくれる。福島先生は行くたびに貫禄が増していく風貌であるが、この奥様は三十年以上の間お会いしてきたが変らない。特殊なサプリメントを飲んでいるのか、新陳代謝というものがないのだろうか、冗談でなく思えるお方なのだ。今まで生きてきて様々な方に出会っているが、この奥様ほど容貌が若いときから変化しない方を、わたしは知らない。

この奥様も第一級の陶芸家でもある。もしかすると、奥様だけが粘土との相性が、特に美容にいいのかもしれないなどと勝手に想像する。

「TEAM SUZUKI MOTOCROSS 監督 渡辺 明」と銘打たれた新しい名刺を福島先生とわたしが戴いた。二人は20年ぶり程の再会であろうか、往年のモトクロス談義がしばしの間続き、わたしと奥様も加わり4人の楽しいコーヒータイムとなった。

芸術論から現今の益子の若手作家を心配される福島先生の話などから、世界情勢、政治、経済、リーマンショックなどにも話がおよび、「株などの操作」でなく、人間は最終的に、「形」あるものを汗を流して生産していくことが基本ですね。というところで皆の話が落ち着いた。

作品を見せてもらうことになり、展示室に案内されると、アキラさんは興奮しつつ鑑賞しはじめた。普段は陶芸など別世界であるはずなのに、この時は意外な側面を見せてくれた。

「写真を撮ってフェイスブックに載せてもいいですか？」とのアキラさんの問いに、福島先生が

快諾される。さっそく作品を撮り記念撮影をした。益子焼を世界に発信すると言い出したのである。



アキラさんの嗜好品の見極めは実に明確である。わたしがお気に入りを示すと、けして同調せず自分の感性に合うものを選び出した。好き好きも十人十色というから、製作者である福島先生方も大変ですねなどと言えば、「自分でも若い頃の作品を見てがっかりすることもあるんですよ」時折、昔、買って頂いた作品を持ってきて「これ気に入ってましてね」などと見せられても、「内心はがっかりしてね、口には出せないし・・・。」みんなで大笑いとなる。これを聞いたアキラさん「ぼくも調子の悪い年のレースの画像見たくなくてね、それなのにそれを知らないファンが世界から「これはあの時の写真でレース観ていました」なんて「フェイスブックにメールしてくるんですけどね、気に入らないのはみんな「削除」しちゃいました。」これも、大うけで、大爆笑！

わたしが、「乗れてるときの写真は良いわけですね、そういう時で、バランス崩し転倒しそうなシ

ヨットはどうなんですか?と、少々イジワルな質問を投げかける」

アキラさんが、乗れている時はそのような「瞬間」でさえ許せるんですよ、立て直そうとしている「フォーム」そのものも「ベストテク」なのです。

この話の内容にわたしは、笑いつつも驚きをかくせなかった。先生も同感かと思う。

この何気なく聞き流しそうな、最後のアキラさんの一言は、多くの「MXライディング」思想を示唆しているものであり、きょうの、益子町訪問の目当ての「最大の収穫」であった気がする。

ああ、忘れてはいけません。お土産に戴いた福島晴雄先生の作品も大切な記念の収穫でした。

先生、奥様、突然の訪問でもあり、すみません。

そして、すばらしい作品を戴きまして、ありがとうございました。

帰り道、アキラさんは随分と「ニュートラル」になったようで、作品販売のお店に寄ると「福島晴雄作品展示コーナー」で、見知らぬ二人の女性が品定めしていた。するとアキラさんが、いいでしょう?友人なんですよこの福島さん、いまお会いしてきたんです。「ああ、そうなんですか、すてきですね」と、二人連れ、さりげなく鑑賞しつつ営業?しはじめている。こういう側面をアキラさんは持っていて、見知らぬ土地で見知らぬ人と極自然にうちとけられるのである。これらは、ヨーロッパのライダー生活8年の経験から培われたナショナリズムでもあるのだろう。

イーグルスのヒット曲「DESPERADO」の題名邦訳が「ならず者」とされていることについて、わたしが「迷いし者」とか「へそ曲がり」のほうが良いと意見をのべたら、アキラさん英語の歌詞をよく噛みしめながらしばらく読みふけていました。意味深な歌詞ですね。

ヒットする曲はメロディーも当然として歌詞もいいものです。

そういえば、「Hotel California」の歌詞に『We haven't had that spirit here since 1969』

(ここには1969年以降のスピリットはありません)との歌詞がありましたヨ。

アキラさんのWGPのタイトル獲得した「1978」に置き換えて、遊んでみました。

「ここには1978年以降の精神はありません」判る人にはわかるかな・・・?

いよいよ、2013年がスタートしますので、「アキラさん」ギアを2速に入れてくださいヨ。

「宇都宮レーシングクラブ」の守護神「鈴木 善司」君も天上から見守ってくれています。

2013年度『TEAM SUZUKI MX』の『無事故と大勝利』をお祈りいたします。